

不確実な現実と日常の間で : 第116回アメリカ人類学会年次大会にみる中東・イスラーム人類学の研究動向

著者	相島 葉月
雑誌名	民博通信
巻	160
ページ	28-28
発行年	2018-03-30
URL	http://doi.org/10.15021/00009040

不確実な現実と日常の間で

—第116回アメリカ人類学会年次大会にみる 中東・イスラーム人類学の研究動向

2017年11月29日から12月3日にかけてワシントンDCで開催された第116回アメリカ人類学会年次大会に参加した。アメリカでは文化人類学、生態人類学、言語人類学と考古学の4分野を総合して「人類学」と呼ぶため、年次大会の規模は非常に大きい。11月30日(木)には1,550、12月1日(金)と2日(土)は約1,300の企画セッションが行われた。大学院生やポストドク研究員だけでなく、ベテランの教授陣やアメリカ国外からの参加者も発表を行うので、人類学の世界的な研究動向を把握するのに最適である。個人発表はもちろんのこと、企画セッションの内容も多岐にわたる。私の研究分野である中東・イスラーム人類学に絞って研究動向を報告する。

人類学的研究と国家政治

今年度の年次大会の共通テーマが人類学的研究の社会的意義を強調した、Anthropology Matters!であったせいか、トランプ政権の樹立やイギリスのEU離脱の国民投票後に広がった人種差別や経済格差が文化人類学的研究に及ぼす影響を危惧したり、特定の政策を批判したりする企画セッションが目立った。From the Refugee Crisis to the Muslim Ban: Vulnerability and Anthropology in Precarious and Neoliberal Times (企画者 Nina Glick SchillerとRuba Salih)や Anthropology in a Precarious Present (企画者 Emilio SpadoraとFadi Bardawil)といったラウンドテーブルのタイトルが示すように、今年度のキーワードは「不確実な現在 (precarious present)」であった。中東や北アフリカの調査地で出会う人々が政治情勢の悪化から不安定な生活を強いられているだけでなく、ムスリム(イスラーム教徒)に関する研究課題を遂行する人類学者も、しばしば危うい状況に直面するという報告が続いた。たとえば、中東のジェンダー研究を専門とするアナリス・ムーアは、シリアに渡ってイスラーム国の兵士と結婚することを夢みるヨーロッパの女性(通称Jihadi brides)に関する調査結果を2016年に英国王立人類学会のニューズレターAnthropology Today紙上で発表した際

に、オランダのメディアにテロリストの支援者との誹謗中傷を受け、大学を通じて法的措置をとることとなった。ムーア自身は、アムステルダム大学の教授ゆえ安定した立場にあったが、本プロジェクトのために雇っていたポストドク研究員は研究者生命が断たれる危機に直面したことによって重い責任を感じたという。難民問題やテロからイスラームや中東の人々に関する差別や偏見が横行する中で、中東・イスラーム人類学を専門とする研究者は「学術的見解」の無力さを痛感するという趣旨の報告が続いた。人類学者は人類学に批判的な傾向にある。ただし、人類学が社会的意義を保持し続けるためにはディシプリンを批判するだけでなく、建設的なアプローチを開拓するべきではないかという意見が交わされた。



オスマン朝時代におけるエジプトのスーフイズム(イスラーム神秘主義)を調査するために、聖者廟を訪れた外国人研究者の一回(2007年1月18日)。

不確実な未来と予定調和な日常

中東やイスラームを研究する人類学者が現実政治に巻き込まれることが懸念される一方で、非政治的空間と想定される「日常」におけるイスラームの実践についてのセッションが多数企画されていた。例えば、'Ilm and the Knowledge Production in the Islamic World: Reconsidering the Everyday (企画者 Matthew Steele) と Tradition, Ethics, and the Everyday: Transcending a Divide in the Anthropology of Islam (企画者 Ismail AlatasとDaniel Birchok) はともに、タラル・アサドが提唱した「言説的伝統としてのイスラーム」とムスリムの日常的な信仰実践との関係性について再考する試みであった。

両セッションの発表者は、スーフィー聖者の教えを歌ったヒップホップを聴いたり、イスラーム説教師のテレビ番組をみたりといった日常的な行為を通じて、聖とも俗とも言い難い場面でイスラームの言説的伝承が再生産されることに着目している。こういった発表は、ムスリムの「日常」は世俗的領域に属し、意識的な信仰実践とは対立関係性にあるとする論考に一石を投じる試みである。サムリ・シルケが、ムスリムの主体はあいまいで相反する感情にあふれており、イスラームへの信仰にのみに終始する訳ではないと論じてアサド批判を展開したことに起因する。「言説的伝統(アサド)」対「あいまいな主体(シルケ)」の構造を打破する試みとして、「日常」を鍵概念としたセッションが多数企画されたのである。

近年、中東の社会情勢やイスラームに関するより正確な知識に対する需要が高まる一方で、人類学者が考えるイスラームに関する「学術的な見解」とマスメディアや政府が求める情報の乖離が浮き彫りになりつつある。アサド対シルケの構造は、社会のニーズに対応できないジレンマを抱えた中東・イスラーム人類学者が構築したフィクションであるように映る。日常の政治性から目を背けることなく、善きムスリムとして生きることを目指す「あいまいな主体」とイスラームの「言説的伝統」との関係性を再考することで、より建設的な議論が構築できるのではないだろうか。

文・写真 相島葉月

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は社会人類学、現代イスラーム思想、中東研究。エジプトをフィールドとした都市中流層の教養と階層観に関する調査を行っている。著書に*Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society* (IB Tauris 2016)、*Consciously Unmodern: Situating the Self in Sufi Becoming of Contemporary Egypt* (*Culture and Religion* 18: 2, pp. 149-164, 2017) などがある。